

邑楽・館林を含む圏域についての考察

——通勤・通学人口を中心として——

竹内章悟*

1. はじめに

邑楽・館林地域（館林市及び邑楽郡の板倉、明和、千代田、大泉、邑楽の5町）は群馬県の南東端、茨城、栃木、埼玉3県と接する位置にある。この地域を含む近隣市町村は県境を超えた圏域を形成しているといわれるが、その圏域とはどのような広がりを持つのか、本稿では国勢調査の通勤通学データに基づいて考察した。

考察にあたっては、本学部の位置する群馬県板倉町より半径約30km¹⁾にある市町村を検討対象として取り上げ、常住人口（以下本稿では「夜間人口」という）、昼間人口及び通勤・通学人口の推移状況を整理の上、各市町村の特徴による類型化を行い、類型毎の地理的分布状況を把握した。ついで、既往研究から得られる市町村の圏域構造に関する知見を援用し、各市町村間の通勤・通学面での繋がりの強弱を概観した。これらの結果より、当地域を含む圏域の広がりについての検討を行った。

2. 市町村の人口等の推移

検討対象として取り上げたのは図7に示す57市町村であり、太田、桐生、足利、栃木、小山、結城、幸手、蓮田、鴻巣、熊谷の各市をほぼ外縁としている。

主として使用したデータは、1980～95年の4回の国勢調査による各市町村の夜間人口、昼間人口、および15歳以上就業者及び通学者数の従業地・通学地別総数と他市町村からの通勤・通学者（流入者）数、並びに常住地別総数と他市町村への通勤・通学者（流出者）数である。これらを整理して夜間人口、昼間人口、自市内就業者（自市町村内に住み、同市町村内で就業乃至就学する者）、流入者、流出者の時系列的推移を見た。2000年国勢調査で公表されている夜間人口（要計表による）も併せ参考とした。

2.1 昼間人口が夜間人口を上回る市町村

流入者が流出者を上回り、昼間人口が夜間人口を5%以上上回る市町村(1995年)には栃木、佐野、太田の3市と総和、五霞、大泉の3町がある。例として太田市の状況を図1に示す。

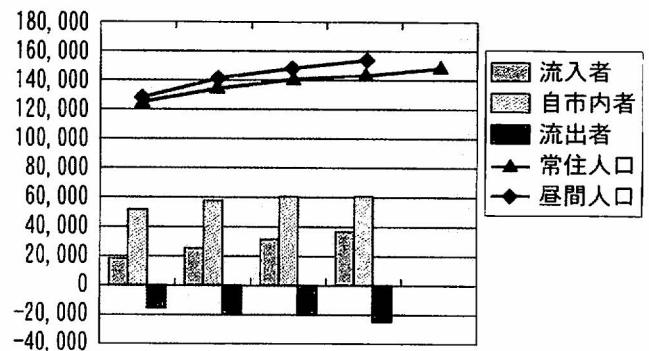
*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

流入者数と自市内就業者数を加えたものが太田市内で（昼間）就業・就学する者、自市内就業者数と流出者数を加えたものが太田市内に住む就業・就学者数である。自市内就業者数はこの10年ほぼ変化はないと見られるが、流入者数は着実に増加してきている。

昼間人口が夜間人口を上回り、かつ人口増の傾向を示している、という特徴は、県都である水戸、宇都宮、前橋の3市にも共

通して見られるところであり、これは太田市が地域における中心的都市の性格を強めていることを示唆している。栃木、佐野両市は人口増の傾向はあまり見られない。また総和、五霞、大泉の3町は工場立地が進展した町であり、その影響が大きいと考えられる。

太田市

図1 太田市の人口等推移²⁾

2.2 昼間人口と夜間人口がほぼ均衡している市町村

昼間人口と夜間人口がほぼ均衡している、すなわち流入者と流出者がほぼ同程度の市町村には熊谷、館林、小山、桐生、足利の5市及び茨城県の境町がある。熊谷市は人口増の傾向を示し、また流出、流入者数は自市内就業者数に比し高い割合を占めている（図2）。一方桐生、足利両市はそれぞれ人口減、横ばいの傾向を示し、いずれも自市内就業者数が多く、流出・流入者数の割合はそれほどでもない（図3）。館林市、小山市及び境町は人口は横ばい乃至若干増傾向が見られるが、いずれも流出・流入者数の割合は熊谷と足利・桐生の間にある。

熊谷が地域の中心的都市として着実に成長する一方で、桐生・足利という歴史ある都市が停滞乃至衰退の傾向を見せていることが見て取れる。

2.3 夜間人口が昼間人口を大きく上回る市町村

上記以外の市町村の殆どは流出者数が流入者数より多く、夜間人口が昼間人口を上回っている。

熊谷市

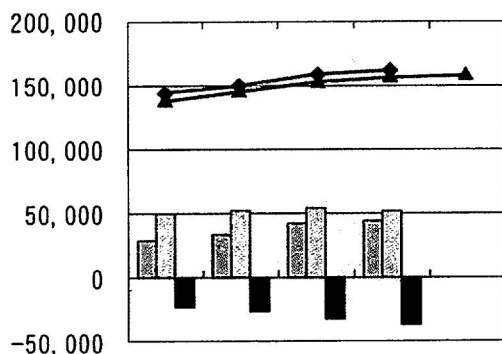


図2 熊谷市の人口等推移

桐生市

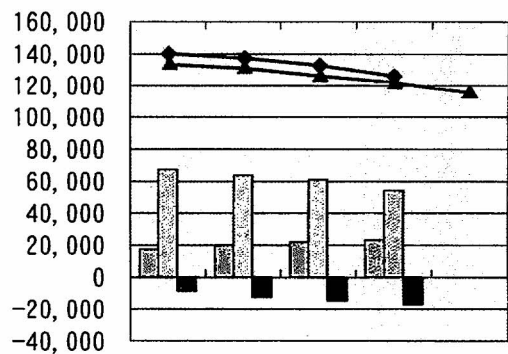


図3 桐生市の人口等推移

その中でも幾つかの性格を異にするグループが見られる。

①自市内就業者数に比べ大幅に上回る流出者（1.5倍から2倍以上）があり、ベッドタウン的性格の強い市町村。蓮田、久喜、幸手市をはじめとして埼玉県南埼玉郡、北葛飾郡の町の多くが該当し、いずれの市町村においても流出者を主体とした夜間人口増の強い傾向にある（図4）。

②自市内就業者数とほぼ同数乃至1.5倍程度の流出者数がある一方、雇用の場の確保により流入者の増加も見られるもの。埼玉県の加須、行田市、菖蒲、騎西、妻沼町、及び群馬県の新田郡、邑楽郡の新田町、明和町等がある（図5）。

③流入者数の増加により昼間人口が夜間人口を上回りつつあるもの。千代田町（群馬・邑楽郡）、川里町（埼玉・北埼玉郡）、大利根町（同）ではいずれも近隣に雇用吸収力のある先行市町があり、そこへの流出者を多く抱えているが、近年自町内への工場誘致が進み、流入者が急速に増加している（図6）。

3. 圏域的考察

流出・流入の比率の高い市町村ほど近隣市町村と強い結びつきを持っている事は推定されるが、具体的にどの市町村との繋がりがあるかについて、上記2.では明らかでない。ここでは鈴木・竹内（1994）による圏域想定の仕事過程³⁾で得られた結果（主として一次圏⁴⁾）を援用しつつ、検討対象とした市町村間の連繋関係について考察する。

鈴木・竹内によると、本稿で検討対象とした市町村は幾つかの一次圏に分けられる（図7）。

①館林市、太田市及び新田郡の新田、尾島、邑楽郡の各町

②桐生市及び南西部の笠懸、藪塚本町、北西部の大間々、更に勢多郡東部の東村、黒保根町等

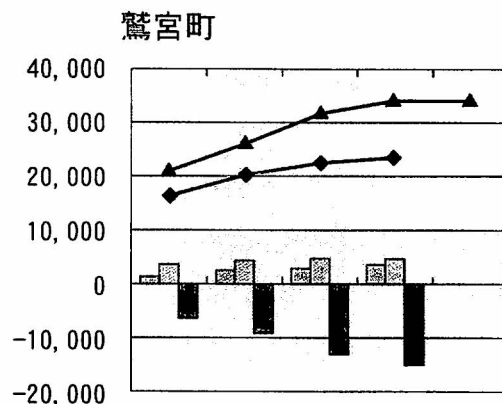


図4 鷺宮町の人口等推移

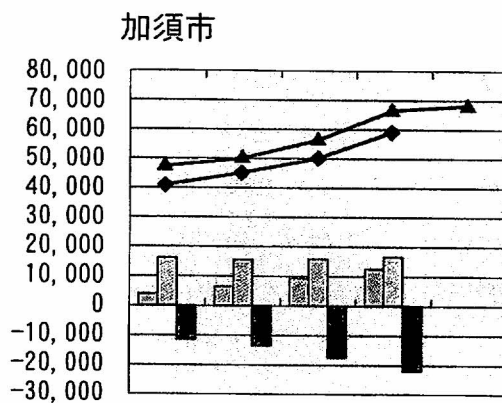


図5 加須市の人口等推移

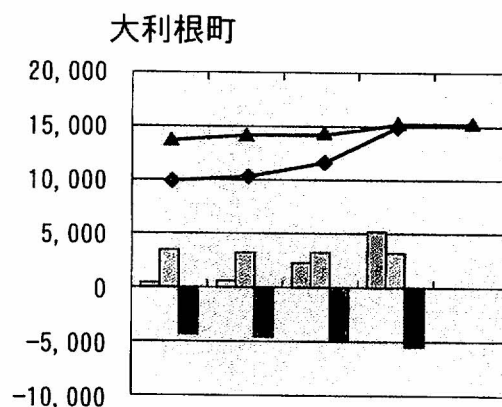


図6 大利根町の人口等推移

③足利市、佐野市及び田沼、葛生町

この三つは更に統合し館林、太田、桐生、足利、佐野を核とした圏域を形成している。すなわち〈両毛地域〉であり、予断を入れずに行った鈴木・竹内の作業からこの圏域が同定される結果となっている。

④栃木市及び下都賀郡の岩舟、藤岡、大平町等

⑤小山市及び茨城県の結城、下館、下妻各市並びに周辺町

⑥古河市及び北川辺、野木、総和、三和、境の各町

④は更に宇都宮・鹿沼・日光の圏域と統合され、⑤⑥は更に五霞町等周辺数町を加えて統合した後、宇都宮・鹿沼・日光・小山・今市・真岡・小山・結城・下館・下妻・古河の各市を含む大きな圏域を形成している。

⑦久喜市及びその北に連なる大利根、栗橋、鷲宮の各町

⑧幸手市及び杉戸、宮代町

⑨蓮田市、鴻巣市及びその周辺町（大宮・浦和・川口市等の都市群の圏域に含まれる）

この三つは前章2.3①に挙げたベッドタウン的性格の強い市町であり、いずれも埼玉県南の都市群が作る圏域に統合された後、更に東京圏に大きく包含されている。

⑩加須市、羽生市及び騎西町

⑪熊谷市、行田市及び妻沼、大里、吹上、南河原町（深谷市及びその周辺町も含む）

この二つは前章2.3②に挙げた流入増も見られる市町である。地域としてのある程度の求心力を持っているが、何れも埼玉県南の都市群、更に東京圏に包含されている。



図7 検討対象市町村及び一次圏

以上のような85年国勢調査をもとにした圏域の状況と、95年乃至2000年までの各市町村の人口等の推移を考え合わせれば、邑楽・館林地域が属する圏域が、既に広域都市圏として行政的に認知されている両毛地域そのものであることを本稿でも支持している。このうち館林市と太田市は通勤・通学上強い連繫関係にある一方、夫々に影響圏を持つ二眼構造をしており、邑楽町、千代田町で拮抗関係にあった（1985年）⁵⁾。また、太田市及び周辺町は人口増と流入・流出増の傾向にあるものが多く、圏域の中での重みを増していることが示唆される。

両毛地域の東から東南方向にかけては、栃木市、小山・結城市等、及び古河市をそれぞれ中心とする圏域があり、いずれも通勤・通学上は両毛とは別個の圏域として求心力を維持乃至強めていると考えられる⁶⁾。また、南方の埼玉県下の市町村は大宮市を始めとした県南地域の吸引力が強く、更に東京圏を指向している。西方については、太田市の西に位置する伊勢崎市が隣接する佐波郡の赤堀、東、境町と一次圏を作っており、更に前橋を中心とした圏域が包含されている。新田郡と佐波郡とが両圏域を分ける境となっている。

しかしながら、邑楽・館林について更に見てみると、この地域は両毛地域の南東端にあり、上述した他の圏域とやや複雑な関係にある。すなわち、板倉、藤岡、北川辺、大利根の各町及び加須市は、5つの一次圏がほぼ相互に境を接するという特異な状況のなかで、各一次圏の最末端に位置している。これら各市町相互間の通勤・通学人口は、市町村単位で見ても最優位の通勤・通学関係ではないにしても、それに次ぐウエイトを持っている⁷⁾。鈴木・竹内の作業では捨象された連繫関係の存在が示唆されるものであり、また大利根町、加須市において近年流入増が著しいことから、これら市町の相互連繫は更に強まっていくのではないかと考えられる。

4. おわりに

以上、邑楽・館林地域とそれを取り巻く各市町村との圏域構造を考察したところ、邑楽・館林が中心となった県境を超える圏域の存在を見出すことは出来なかった。むしろ当地域は行政的に認知されている館林、太田、桐生、足利、佐野の各市及び周辺町村よりなる両毛広域都市圏の東南端にあるということを再確認した。しかし、板倉、藤岡、北川辺、大利根各町及び加須市が相互に連繫している側面も見られ、規模は小さいながらも圏域に準じたまとまりが推定され、近年この傾向は強まってきているのではないかと考えられる。

いずれにせよ本稿で考察に用いた圏域統合状況は1985年国勢調査通勤通学人口を基としたものであり、その後一般に流入、流出者数は増加し、全国的に見ても流動状況が一層高まっていることを考えると、至近の通勤通学人口を用いて詳細な圏域形成状況の変化についての分析を行うことが課題として残される。

（注）

1) 国勢調査において設定された地方都市の都市圏の範囲が概ね半径30kmに納まることから、本稿での検討対象

も30kmをとれば十分と考えた。

- 2) 時点は左より順に1980、85、90、95年。夜間(常住)人口のみ2000年データを加えている。3本の棒グラフは左より流入者数、自市内就業・就学者数、流出者数を示している。(以降の図も同じ)
- 3) ある2市町村を一つのものとして仮定した場合、相互間の通勤通学人口が「自市内通勤通学」と見做されることにより自市内就業・就学率が上昇するならば、その2市町村を統合する(最も高い率となる市町村のペアを選択)。全国の市町村についてこの作業ステップを反復実施し、圏域の重層的統合状況を推定している。1985年国勢調査データを使用。
- 4) ここで一次圏とは、原則として圏域統合作業の第一ステップで統合した市町村グループを言うこととする。
- 5) 詳細に見ると、85年時点では邑楽町、千代田町は太田、館林市の影響圏の狭間にあり、圏域統合作業の第一ステップでは館林・太田のいずれにも属していない。
- 6) 小山市は流入・流出増の傾向及び人口の増加基調が続いており、栃木市も人口はほぼ横ばいであるが、流入・流出はともにやや増加傾向にある。古河市は周辺町特に総和、三和町の人口増及び流入・流出増の傾向が続いている。
- 7) 板倉町は流出・流入先ともに館林市が最大であるが、1995年では藤岡町、北川辺町もそれに次ぐウエイトを占めている。北川辺町の流出・流入先は古河市が最大であるが、1995年には加須市がそれに次ぎ、更に大利根町、板倉町が続いている。藤岡町は1985年では、大平、岩舟町とともに栃木市に含まれているが、1995年では流出・流入先は佐野、小山両市が1、2位を占め、次いで栃木・大平・岩舟、更に板倉等と続く。藤岡町の一次圏所属先のあいまいさが強まっていると考えられる。大利根町は最大流出先の東京を別格として、1995年の流出・流入先は加須、栗橋、久喜の順となっており、久喜よりもむしろ加須市との連繋が強まっている。加須市は最大流出先の東京を別格として、1995年の流出・流入先は羽生市、久喜市、ややおいて大利根町等となっている。羽生市等とのつながりが優位にあるものの、大利根町との連繋も無視できない。これらのことから、加須—大利根—北川辺、加えて板倉、藤岡という構図が想定される。

(参考文献)

総理府統計局『国勢調査報告書』(1980, 85, 90, 95)

鈴木勉・竹内章悟「全国圏域構造の分析—80年代の人口分布動向」『電力経済研究』No.33, pp49-58, (財)電力中央研究所経済社会研究所(1994)

Definition of the Regional Territory Involving Oura-Tatebayashi Area

Shogo TAKEUCHI

This paper discusses the territory of the local region in which Oura-Tatebayashi Area, Gunma pref is involved, using daily trip of workers and students by National Census. It shows the territory may be composed of cities Tatebayashi, Oota, Kiryuu, Ashikaga, Sano and their outskirts towns, and also hints a possibility of sub-area including Itakura, Fujioka, Kitakawabe Towns and Kazo City.